

主治医から見た統合失調症家族心理教育の意義に関する検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, かをる メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31571

主論文の要約

主治医から見た統合失調症家族心理教育の意義に関する検証

An Empirical Study of Attending Psychiatrists' Views on the Significance of Family Psychoeducation for Schizophrenia

東京女子医科大学精神医学教室

(指導：石郷岡 純 教授) 印

辻 かをる

東京女子医科大学雑誌 第 86 巻 臨時増刊 1 号 E59 頁～E66 頁 (平成 28 年 1 月 31 日発行)
に掲載

【目 的】

統合失調症の家族心理教育は、患者や家族に関して強いエビデンスが示されているが、実際の臨床の場において医師が感じる効果や評価の報告はほとんど知られていない。

本研究では、主治医の立場から、家族心理教育（家族会）に参加した家族の変化をどう感じたかを明らかにし、家族心理教育がどのような意義を持ち、治療のなかでどのように位置づけられているのか、を検証することとした。

【対象および方法】

2013 年 4 月から 2014 年 12 月の間に実施した家族会全 4 クールに参加した家族 24 人について患者の外来主治医を対象とし、10 名から協力を得た。

半構造化面接により、家族会参加前後の家族の「病気の知識」「患者さんへの対応」「医療（病院・医療者）との関係」「家族自身の疲弊」に対する対象者の評価を問い、質的分析手法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した。また、上記 4 質問項目および総合評価として「当該家族に対し家族会がどのくらい有益であったか」について、それぞれ visual analog scale（以下 VAS：良い 10-悪い 0）を用いて量的にも評価した。

【結 果】

家族会参加前後の家族の変化として外来主治医がとらえたものから、前後各々 7 つのカ

テゴリーが生成された。「家族会参加前」には、〈知識がない〉〈病気だと認識していない〉〈患者の状態をつかめない〉〈病気を受け入れられない〉〈不安や苦痛〉〈家族の考えで指示し観察〉〈協働の困難さ〉の7つが抽出された。

「家族会参加後」には、家族会参加前に得られたカテゴリーの領域が各々に改善して、〈知識がある〉〈病気であるとの理解〉〈患者の状態の理解〉〈病気の受け入れ〉〈落ち着きや笑顔〉〈患者の選択を尊重〉〈協働〉の7つが見いだされた。

家族会参加前後で、ストーリーラインのプロセスの流れは共通しており、各要素が改善方向に変化したと示された。

量的データでも、全項目において改善が見られ、総合評価への回答の平均値は 7.9 (SD2.0) であった。

【考察と結論】

家族心理教育（家族会）を患者の主治医はどうとらえているかを調べるため、患者の外來主治医を対象に調査を実施し、概ね、家族会は有益との結果を得た。質的分析を通して、主治医から見た家族会参加前後の家族の変化のプロセスが明らかとなった。家族は、正しい知識を得て、病気および患者の状態について理解が進み、情緒が安定し、病気を受容することで、適切な対処が可能となり、行動が変容しており、こうした家族会の作用は心理教育の適宜に合致したものと考えられた。

家族会への参加により、家族の状態は改善したと評価され、それを根拠として家族会全体は有益と評価された。主治医は、介入対象たる家族のアウトカムを期待し、家族心理教育は家族の状態改善をもたらすという役割を持つものと位置づけられていると考えられた。